

日本人美術家が外国（パリ）で逮捕されたら「どうなるか？」それを美術と化した「裁判パフォーマンス」美術の国際化の最前線からの報告と記録。

「はてしなく続きはてしなきことの本の序文」

桜井孝身で

何処かが突きぬけたところが欲しいと考えた。これは監獄に入ったからかもしれない。別言すれば徹底的にオープンした状態を待ち望んでいる。そして1987年9月2日、大阪のABCギャラリー個展を開き、偶然にも天王寺動物園前という地下鉄駅前からひろがる釜ヶ崎なる地帯の最高級ホテル、1,700円に泊って、いま、出版されるのか、出版されないのか、かい目わからない。今回の私の出版物、即ち本について考えてみる。今年の2月20日に逮捕された時はカッカとして燃え上った焰も、福岡での甘木、小倉での個展を終り大阪での同時三カ所での展覧会を開催している現在、帰国して、それにもかかわらず盛大な個展をつぎつぎに行い、そのたびに盛大に飲んで、疲労をつみかさねてゆく道程は、精神的焰を消してゆき、この疲れた時間の中では、どうでもよくなり、出来てよし、出来なくてよしという感じが色こいくにじみ出てきている。そのニジみの生活を背負って友人からの酒招待を断り、釜ヶ崎の労働者の宿に泊っていると、確かなやすらぎを感じず。

確か23年か、20年前だか、ちょうど堀内ケサオ先生とニューヨークのスラム街をウロツいたことを思い出す。あの薄汚れたスラムでは貝、トーモロコシを売っていて街中を犬が走り、子供がたわむれて、なにか私たちの村の小さなカーニバルを思わせる楽しさがあった。勿論、夏の暑さにつれて起ったスラム街の暴動以前の話である。

そして、この釜ヶ崎のことを、フランス国営テレビ第2チャンネルが日本特集のドキュメントを作り放映した時、新宿のドクドクしいSEX産業に比較して、農村から出稼ぎにきた中年労働者の、釜ヶ崎のシーンを見て我が友人、アイリンは、「桜井、釜ヶ崎は何処にあるか、日本では（特集ではの意味）あそこが一番よかったネ」と語ったものだ。

思えば、偶然にも私はニューヨーク、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、パリ、ニューデリー、ネパール、マニラ、パンコックのスラム街を見ていることになる。最初から見ようと、ワザワザ計画して行ったワケではない。画家の貧乏旅行が安い所、安いものと捜した結果が、そこへたどりついたのかも知れない。スラム街は田舎にはない、何処の国でもニギヤかな場所の裏側にある。或は、ニギヤかな場所、そのものがスラム化したアメリカのドーナツ現象もある。私は、ここでスラムについて語るつもりはない。何故か、いつの間にかスラムに近づく私の心が不思議に思えるのである。

パリで知り合った成瀬という先生がいる。御主人は弘とって奥さんはマミという立派な先生たちである。二人の子供がいて、長男はムイ、長女はマヤという名の先生である。この一族がフランス人の友人ともども日本へやってきて、一夜、大分の宇佐、石松旅館なる写真家の石松先生宅に風倉先生はじめ一同集ったのである。